

第 42 回情報交換会の記録～yubeot 時代の概説（続）～

日 時 2021 年 12 月 4 日（土）13 時 30 分～14 時 30 分
場 所 せたな町生涯学習センター
講 師 佐藤剛氏（公益財団法人北海道埋蔵文化財センター）
参加者 31 人（うちオンライン 13 人）

1.1 考古学における時代区分

1.1.1 考古学としての文化と時代の枠組み

はじめに、前回の補足として考古学における文化と時代区分についてお話しします。

続縄文文化におけるこの島の当該期の土器群について検討を行った結果、石井淳氏による遊動社会としてのまとまりを確認することができました。このような文化的なまとまりについて、当該期の yaunmosir 島の人々による、独自で固有の文化として yubeot 文化を捉えました。これは高瀬克範氏が弥生文化や古墳文化と等置する存在、「考古学的大文化」としたものです。

私の理解は、考古学はヒトにより遺跡に残されたものを通してその背後にあるヒトを科学していると思います。そのため、チャイルドによる考古学的文化、共存緒型式の常時的組み合わせについては、現代的にはそれらのまとまり、モノ・コトの検討を通して、それをういたヒトとその文化・社会のあり方を考えるための理論や方法論としての位置づけです。考古学的な研究から得られる文化や社会のあり方が考古学的文化に還元されたものと考えています。

このように「考古学的大文化」を捉え、その文化のまとまりを時間幅の時代として区分、叙述することで歴史とすることとしました。これらのことは私が考古学を歴史学の一員として考えているということでもあります。

考古学的時代区分としての課題の現状での整理です。各文化の境界域、縄文と弥生、弥生と古墳の文化の境界域では様々な議論が行われています。それらの議論について課題がすべて解決して、共有されているわけではないでしょ

う。これらの課題は常に検討される過程にあります。ただ、課題は持ちつつも本州列島の研究者も含めて良いと思っていますが、私たちも含めて文化と時代の枠組みをもってそれぞれを検討していると考えています。このことは、それぞれの文化の持つ普遍的に出土する土器群のまとまりの枠組みが、各文化・時代の枠組みとしておおまかには機能しているためだろうと思います。たとえば、縄文土器とか弥生土器とか土師器などがそれに当たると考えています。そうした枠組みが当該期のこの島で可能なのだろうかという、私は yubeot 土器により可能だろうと考えています。そのため、細別器種の構成が少ないという特性をもつ yubeot 土器による区分を示すことに努めました。

1.1.2 歴史学としての文化と時代の枠組み

次に歴史学としての文化と時代の枠組みについて、現状でよく用いられる山内清男と近藤義郎の定義からしか yaunmosir 島の文化と時代は検討できないのだろうか、という疑義です。このような続縄文式、続縄文文化の規定と「発展段階論」からの弥生時代や古墳時代の規定とそれによる歴史叙述などにより、日本列島における yaunmosir 島の文化と時代の歴史認識とその叙述がその後大きく良い方向に変わったようには私には思えません。そして、それらはむしろ現代では、この島の人々、先住民族である Aynu 民族と共生する和民族、私達、多数者との歴史とその価値を狭めているのではないか。歴史学は誰のための何のための何をめざす学問領域なのかという疑問があります。そのため、前回の論考の構造として、当該期の概説によりこれまでの検討を踏まえ、考古学的に当該期の実際の資料に基づいて yubeot 文化を区分し、それをもって時代を区分し、文化と時代の新しい枠組みを示したと考えています。

yaunmosir 島の yubeot 文化とその時代の広がり、本州列島の様々な文化と時代に広く関わっています。そのため、逐一そのすべてを検討して示すことは容易ではありません。

本州列島の研究者による各文化と時代の区分も、それぞれの文化と時代のまとまりごとに検討しているため、そのすべてについて具体的に資料に基づき検討して示したものではありません。こうしたことから、この島と yubeot 文化の研究者側にのみ、それらのすべてを求めることは、立場としては公正ではないと私は考えます。

1.1.3 歴史教育の観点から

次に歴史教育の観点からですが、やはり、文化と時代の枠組みは必要だと考えます。スライドの右側の方に示していますが、加藤博文氏と若園雄志郎氏が編集された『今学ばアイヌ民族の歴史』という本では、Aynu 民族の歴史を通史として提示するために、適用することは無理としつつも、古代・中世・近世・近代・現代を用いて通史を説明しています。それは高校までの日本史がこの枠組みを用いているためとしています。

1.1.4 小結

私は 2020 年に短い歴史叙述を行いました。実際に、この島の人々に歴史叙述を行ってみると現在の歴史叙述では本州島の和民族の歴史と yaunmosir 島の Aynu 民族の歴史を等置して叙述するしかないのではないかということに気づきました。歴史叙述はこれらのように教育や研究のためだけでなく、様々な場面で広く行われます。本州列島に由来する和民族はこれまでも自らの文化と歴史について、独自の「文化」と「時代」を用いて叙述してきました。同じ価値と同等の内容をもつ Aynu 民族の隣人としてこれからの共生を考えるのであれば Aynu 民族が先住民族である yaunmosir 島の人々の歴史を語る際には、独自の「文化」と「時代」としての「yubeot 文化」と「yubeot 時代」が必要と考えます。補足については以上となります。

1.2 yubeot 文化の土器群

次に、前回に具体的に示せなかった土器群の検討を行います。ここでは主に型式論として検討していきます。各型式と土器群の地域と時期の位置づけ、広域編年への位置づけを行い、次に各型式及び土器群の遺跡での在り方と遺跡での時期的な在り方について検討します。

第 1 図^{*1}は斎野裕彦氏による東北地方の広域編年と対比したものです。細部では二枚橋式の古段階・新段階は高瀬克範氏の編年によります。恵山式の細分については大坂拓氏によっています。

1.2.1 尾白内Ⅱ群

この時期の土器群は尾白内Ⅱ群、下添山式、恵山式になります。尾白内Ⅱ群は弥生時代前期末葉並行で、東北地方北部で水稻稲作が始まった時期です。東北地域では弥生時代の始まりにあたります。同様に下添山式は弥生時代中期前葉にあたり、朝鮮半島製の鏡や青銅製の武器が北九州を中心に玄界灘沿岸地域の有力者のお墓に副葬品としてやや広く見られる時期で、青銅器時代の始まりとも考えられています。恵山式にあたるのは弥生時代中期中葉、神奈川県小田原市の中里遺跡にみられるように、南関東地域には溝で区画した低位段丘上に本格的な稲作農耕集落が営まれる時期にあたります。次から、型式と土器群を少し詳しく見ていきます。

第 1 図の左側が尾白内Ⅱ群の土器を示します。右側に中部地域の土器を示しました。右との類似点が多く、これはこの島に固有の土器群で yubeot 文化の土器群と考えられます。

1.2.2 下添山式

次に下添山式ですが、図の左側になります。右側の方に同じ中部地域の土器を並べていますが、一見して、同じ時期の左側の土器群とは異なっており、この土器群については弥生文化の土器群と考えています。

次に恵山式ですが、今回の第 2 図から第 8 図を見て下さい。上段の下添山式同様に、恵山式の土器群と考えます。スライドに本州島北部の弥生土器群を示しました。細かい文様など細部においては異なることが多いのですが、恵山式もこの弥生土器の土器群と考えています。

1.2.3 恵山式

恵山式について詳しく見ていきたいと思います。恵山式の遺跡での在り方です。

図では中段の上の茂別期が茂別遺跡の土器群となります。土器の検討は工藤研治氏がおこなっており、二枚橋式はほぼ出土していないこと、恵山式は西桔梗 B2 遺跡から大中山 5 遺跡出土資料の段階とされています。また、竪穴住居の検討は立田埋氏が行っていますが、掘上げ土の観察から H3、H2、H4 の前後関係が得られています。各期が該当する土器群になります。

ここせたな町の南川遺跡の土器群ですが、2 回検討が行われています。高橋和樹氏は、峰山巖氏、中村五郎氏の検討を元に恵山式を細分しています。そこではⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ群に細分しています。Ⅰ群はほぼ縄文晩期最終末から続縄文期初頭の土器群、Ⅱ群が田舎館式が成立する少し以前の土器群、Ⅲ群土器が西桔梗 B2 遺跡出土資料のような恵山 A 式土器のグループ、Ⅳ群土器が恵山 AB 式土器のグループ、

^{*1} 本稿掲載図は『第 42 回南北海道考古学情報交換会発表資料集』(<https://sitereports.nabunken.go.jp/122778>)を参照

第Ⅳ群土器が恵山 B 式土器のグループとしています。

南川遺跡では竪穴住居や土坑群などの検討は田辺淳氏と加藤邦夫氏が連名で行ってます。そこでは土器群の分類からⅠ期とⅡ期に分け、さらに乳白色火山灰の堆積状況からⅠ期をⅠ A 期とⅠ B 期に分けています。

このような検討の状況から、恵山式の変遷を検討する各時期について、遺跡ごとの土器群のまとまりにより、茂別期、南川Ⅲ群期、南川Ⅳ群期に大きく区分します。さらに、遺跡での遺構と遺構群の新旧により時期については細分しました。

1.3 yaunmosir 島南西部地域の yubeot 時代初頭からⅡ期併行期の土器群の細分について

1.3.1 各型式及び土器群の細分

ここから yaunmosir 島 yubeot 時代初頭からⅡ期並行の土器群の細分になります。主な対象は下添山式と恵山式の土器群です。検討に用いた方法は、辻秀人氏による細別器種と様式によっています。なお、尾白内Ⅱ群は別の様式、yubeot 時代初頭土器群と考えていますので、おおまかな対比にとどめます。細別器種の分類ですが、たまに誤解を受けることが多いかと思いますが、分類は必ずこのように認識しなければならないということはありません。あくまでも私がこのように認識した細分案とさせていただければと思います。時間がありませんので、この部分については後からご確認いただければと思います。

細別器種の分類としては、yaunmosir 島南西部地域の弥生時代中期土器群様式を認識しました。この構成については、甕 A1・A2・B・C・D・E・F、深鉢 A、浅鉢 A・B、鉢 A・B・C・D・E、台付鉢 A、高坏 A・B、壺 A・B・C、ミニチュア土器というような構成を確認しています。この中で、主要な細別器種と考えるものは、甕の A・B・C、浅鉢類、鉢類、高坏類となります。

これらの図にある土器群については、島の中部地域や尾白内Ⅱ群土器様式のような yubeot 時代初頭土器様式とは大きく異なっています。このような細別器種とその構成をもつものは、大きくは当該期の弥生土器、弥生文化の土器様式と考えています。

1.3.2 型式期と細分型式期の対応

様式の各段階と型式期と細分型式期との対応について説明します。

一段階とした中期前葉は下添山式期で、中期土器様式の成立期となります。東北地域との斉一性が高い土器群ということが言えます。二段階は中期中葉主体で、恵山式茂別期、恵山式南川Ⅲ群期で、恵山式の成立期と位置づけます。

この段階で特に重要視したいのは甕 B と分類した器種の成立です。この点については後でもう少し詳しく説明します。三段階、中期後葉主体の時期は、恵山式南川Ⅳ群期で、甕類では甕 C・E が存続し、全体の細別器種の種類が減少します。この中では深鉢 A とした倒鐘形が見られることが特徴となります。

1.3.3 各段階の甕類における主要な施文位置の変化

次に各段階の甕類における主要な文様の施文位置の変化と無文帯の有無についてです。

第 3 図の甕 B は、二段階の始めの恵山式茂別期 H-3・9 期に恵山式期の特徴である主に壺類と甕類の器形の整形技法、主要な文様の共有と共通化が明確に確認でき、継続します。これは第 2 図における甕 A1・A2 ではみられません。文様では壺類の肩部、胴部上半の主要な文様帯と、甕 B における胴部上半の主要な文様帯が共通しています。

第 4 図の甕 C の主要な文様体は、二段階から口縁部と胴部の屈曲部から胴部上半になり、二段階まで甕 B の口縁部下端から胴部上半の段までにみられた文様帯と共通します。

三段階からは、口縁部と胴部の屈曲部から胴部上半に沈線区画の帯状縄文による文様をもつものが出現しています。甕類の無文帯は三段階で消失を確認しています。

これらのことから何が言えるのかといいますと、これまでややあいまいなところがありました「恵山式」の分類について、二段階の始めの恵山式茂別期 H-3・9 期における甕 B 類の出現を重要視することができると考えています。同じ時期の甕 A1・A2 では下添山式から引き続くものとなっているため、そうしたことがみられないからです。

1.4 いくつかの課題についての共有

1.4.1 遠賀川系土器

いくつかの課題について共有したいと思います。

まず、遠賀川系土器について、佐藤由紀男氏によって七飯町国立療養所裏遺跡出土の類遠賀川系土器の鉢形土器が指摘されています。この土器そのものは砂沢式併行期ですが、恵山式では顕著ではない口辺部のヨコナデとハケ目かと思われる調整痕が見られるとしています。東北地域北部での様相を検討する必要がありますが、このことは恵山式の編年の位置づけとも関連します。

第 1 図の斎野氏の広域編年によれば、Ⅲ期とする中期中葉は晩期から存続する A 類と壺の B 類、遠賀川系土器がほぼ消滅する時期と考えられています。恵山式にも現状では遠賀川系土器は確認できていないため、これは、中期中葉の位置づけが可能になるかと思っています。

1.4.2 傾斜編年

次に傾斜編年についてです。第1図に示した東関東と仙台平野以北の地域では、弥生中期から後期後半までの編年対比が具体的には線が引かれてませんので、なかなかうまく示されていないのではないかと考えています。このことについては、関東地域周辺と東北地域、yaunmosir 地域との型式の共有がなされていないことが原因ではないかと考えています。その原因がどこにあるのかということを見ると、関東地域周辺での型式の細分が進んでいるのですが、型式の共有については、あまり配慮されていないのではないかと考えています。私自身も弥生後期の広域的な交流については考えたいと思いまして、土器群による検討を目指したことがあります。ですが、正直なところ、関東地域周辺の型式を介すると、各研究者がそれぞれ細分を行っているため、型式としての対比が難しくなり、段差のついた型式対比しか行えなくなってしまうという覚えがあります。このような段差のついた型式対比を行うと、傾斜編年になってしまうので断念しました。ただし、これは私だけが思っているのではないのでしょうか。ほかの研究者の方からも比較的良好に聞く話ではあるため、同じような経験をされた方が多いのではないかと考えています。こうした研究者間での共有についてはシンポジウムなどで解消されて共有されたいと考えていますが、現状でもこのようなことが起こっていますので、これまでも同様のことが繰り返されてきたのではないだろうかという危惧をしています。

第1図で用いている斎野氏の土器群の検討については、編年表で各地域での型式が対比されているため、原則的には型式間の段差は見られないことになっています。このことは、関東地域の南西部を介さずに、北陸地域と関東北部を経由して、近畿地域以西との型式の編年対比を行ったものと私は捉えています。そのため、斎野氏の広域編年の表を用いています。

私は研究の多様性については理解しているつもりですが、あくまでも研究者間の共有により担保されるものと考えています。こうした課題を提示することについてはなかなか批判的な部分もあり、勇気がいることでもあると思いますが、当該期の土器研究とともに、考古学研究の本質的な課題を含んでいるのではないかと考えて、提示させていただきました。ぜひ、みなさんのご意見を頂戴したいと思っています。

1.4.3 三段階での甕 C への集約化と細別器種数の減少

ここからはレジュメにはありませんが、私が現状で考えていることを今後検討していく必要があると思っています。提示させていただきました。

まず、三段階での甕 C への集約化と細別器種数の減少について、主に第2図から第4図です。三段階で中型から大型の甕類が甕 C のみとなり、ほかの器種でも全体の細別器種数が減少しています。一つは、型式論としてはこのようなまとまりを型式として理解することは可能なのだろうかということです。このことは、田舎館Ⅱ群とⅢ群、田舎館式や大平Ⅳ群2・3類などとの共通性と差異として認識できるのか、という点を指摘したいと思います。

様式論としての理解では、段階として3段階設定していますが、深鉢 A が見られることにより、島中部地域との交流がこの段階に深まったため、細別器種の構成が減少している可能性があるのではないかと考えています。

1.4.4 中期中葉から後期に位置する各型式

次に中期中葉から後期に位置する各型式について、まず、アヨロ 3a 類土器群について、これまでに鈴木信氏によってアヨロ 3a 式と後北 A 式の併行関係が得られています。私の検討では大坂氏の恵山Ⅱ式、南川Ⅳ群土器群、アヨロ 3a 類土器群を中期後葉へ位置づけています。この时期的な位置づけについてどのように考えるかということについては、アヨロ遺跡出土の土器群について、型式論としての分類による操作をどこまで認めるかということになるのかと考えています。この土器群は、島南西部と中部地域の太平洋側の白老町で認められたものです。現状での私の認識は、大きくは恵山式の地域的なあり方と捉えています。現状では、島中部地域の江別太式・軽川式土器群は二段階の中期中葉に併行関係としては主体があると考えています。

1.4.5 後北 A 式、中期後葉と天王山式系後期の前後関係

次に、後北 A 式、中期後葉と天王山式系後期の前後関係についてです。現状では、後北 A・B 式の口縁部を横環する擬縄貼付文を天王山式系土器、受け口状の複合口縁を用いる人々が受容して、複合口縁に交互刺突文として表現した可能性があると考えています。このことについては、詳しく検討するために受け口状口縁の単純口縁を持つ土器で、交互刺突文を持つものの中に古く位置づけられるものはあるのか、それともないのかということを検討する必要があると考えています。

1.4.6 鷲ノ木式についての見解

最後に大坂氏による鷲ノ木式についてです。今回は、第1図でカッコ付きで使用しました。その理由としましては、はっきりとした型式とするには、遺跡から層位的に出土したものを分類したものという意味で、分類そのものが難しく、困難であると考えためです。このことは、大坂氏自身も指摘をしています。この論考の中では、「逆説的に」と述べているのですが、型式であるためには分類できない型式

は認めにくいと思っています。このことは、型式としては再現性が少ないことを示していることであり、他の研究者と型式として共有することができないのではないかと考えているためです。また、後北 B 式から C1 式に併行するものとして時期的に限定した場合であっても、恵山式とともに出土する中部地域からの影響を受けたものと分離することができないと考えています。このようなことから、大坂氏の鷲ノ木式としたまとまりを考えるのであれば、むしろ後北 B 式から C1 式そのものも含めて遺跡でみられるまとまりとしての土器群として型式として設定するほうが、後北 B 式から C1 式が一つの遺跡内で見られるこの地域の実態に近いのではないだろうかと思っています。そうした意味で、聖山 K 群土器がある可能性を考えています。そのような読み替えが可能なのであれば、鷲ノ木式については同意したいと考えています。

1.5 まとめ

それではまとめに移ります。これまで本講演では前回の補足を行い、当該期の部分を型式論と様式論から検討しました。そして、弥生時代中期土器群様式を認識して図に示しました。最後になりますが、様式と各段階について、年代観を含めて表記していきたいと思っています。

時期的な年代観については厳密なものではなく、土器群を検討する際の参考程度として示したものです。これで講演を終わりにしたいと思っています。ありがとうございました。

1.6 質疑

司会 ありがとうございました。それでは質問がありましたら挙手をお願いします。

宮本 時代呼称について、もう少し詳しく説明いただければと思います。これはつまり、最初にその時代の遺跡が見つかった遺跡に由来しているということですか。

佐藤 これは昨年度の講演でお話した内容で詳しく説明していますが、研究の初期に名取武光や河野広道が江別市で調査された地域について、そこまで遡って命名しています。河野先生などの研究の倫理的なところで、みなさんが感じるのであれば、その後には高橋正勝氏などが行われた江別太周辺ですね、どういう形であっても、調査された遺跡や地域の名称をつける方がより良いのだろうと考えています。なおかつ、ここは先住民族が Aynu 民族なので Aynu 語の表記を検討したということです。

宮本 そういうことでいうと、その前の時代、縄文時代についてはそのまま良いのか、擦文時代についてはどのような呼称をお考えになっているのか聞かせていただきたいです。

佐藤 貴重な質問ありがとうございます。2020a とした文献で書いたのですが、旧石器時代や縄文時代については確かに地域差が検討されているところではあると思います。しかし、さきほど述べたように、縄文時代という枠組みをなぜみんなが共有できているのかと言えば、大きな意味では縄文土器があること、縄文土器を使用している日本列島を中心とする人たちが定住し、狩猟採集しているという意味での共通性の方が高いのではないかと思います。それに比べて、続縄文の文化は定住をしないで遊動的な生活を行う、それは恵山は弥生文化の土器と考えるのですが、恵山を除いたときには非定住的な遊動的な生活や遺跡のあり方をしているかとまとめています。擦文については、投稿している論考がありまして、遊動的な生活を行う続縄文文化の後に、その人々は 6 世紀末以降に定住生活に変更します。定住生活をするのだけれども、狩猟採集を行って、小規模な農耕を行って定住集落を作るような文化として、そこは擦文文化の名称を変えようと思っています。その後に、瀬川拓郎氏はもっと早い時期に考えるかもしれませんが、通常、アイヌ文化期と考えるとところが、二風谷文化と私は理解するので、その部分についてはまた別な要素があると思います。ただ、どのような形であれ、そこに大規模に人が移動してきたとか、移住してきたということは全く考えていません。移住が全くないとは言わないのですが、そういう大きな人の変化がなく、明治期以降の開拓という農地化・産業化の歴史がある中で、いわゆる近代化の中で和人、和民族が大量に移住することになったと考えています。それまではこの島で、どういうふうに考えても人が入れ替わったとか、征服したという痕跡は考古学的にはないのではないかと考えています。

宮本 時代呼称の考えがどこまであるのかと思い質問しました。

司会 貴重なご意見ありがとうございます。予定の時間となりましたので、以上で基調講演を終了します。佐藤さんありがとうございました。

(記録：石井淳平)